

---

# クレア

HEATH

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

クレア

### 【著者名】

HEATH

Z3382E

### 【あらすじ】

私はクレア。16歳、学生。私の周囲は常に非日常に侵食されていて、私はそれを眺めるのが日課だ。ただ一つ言つなら……できればもう少し静かに暮らしたい。そして今日も、日常と非日常のせめぎ合いは続く。

## クレアの日／プロローグ

私の名前はクレア。

フルネームはクレアフェルゼ・ルーク。

現在16歳。現役学生。肩で揃えた灰色の髪、灰色の瞳。それ以外は特に特徴もない、至って普通の女子だと思う。思う、というのはあくまで主観だからで、たとえば学校の制服を着て外を歩けば、それなりに目立つらしい。

「ねえ君、ジラ・ニー学園の子？」

ジラ・ニー学園。

名前を聞けば誰もが知っている、金持ちや権力者の子供が通う名門校。

私が今まさに着ている学生服こそその証で、胸に刺繡されている臍脂の徽章を見れば決定打である。

なかなかに渋いというかシックなデザインのこの制服は、私もお気に入りだ。

しかし目の前に立つ男たちは制服が気になつたから話し掛けたわけではないようで（女子の制服に興味を持つて近づいてくる男など願い下げだが）。

ベンチに座つて読書をしていた私が顔を上げると、彼らはにやにや笑いながら必要以上に近付いてきて、必要以上になれなれしい態度で、私を囮んだ。

私は左から順に彼らを一通り眺め、とりあえず尋ねる。

「なにか御用ですか？」

「暇そりだね。ね、これから遊びに行かない？」

一人が許可もなく、私の横に腰かける。心持ち身を引きながら、私は答えた。

「お断りします。人を待ってるもので」

「え、もしかして彼氏？」

「いいえ」

「じゃあ友達？」

「ええまあ

「へえ。じゃあその子も一緒にどうへ。」

私は少し考えた。

それはそれできつと楽しいのだろうが、できればあまり叶ってほしくない願いである。

「……やっぱりお断りします」

「どうして？」

「あなた、信じます？」

問い合わせられて、私の隣に座った人は首を傾げた。

「たとえば怪しげな道具を専門に扱う店とそれ以上に怪しげな店主」

「へ?……」

「たとえば口を開けば本物の災いを運んでくる恐怖のトラブルマイカー」

「い、いきなりなに?」

「たとえば家政婦やつてる最強の叔父」

「なんの関係が……つてそれは家政夫じゃ」

「たとえばなにもかもに恵まれた神の血筋の双子」

「……君、宗教関係者なの?」

「たとえば悪魔のおばあさん」

「いきなりおとぎ話か」

「たとえば……私の父」

そして私は立ち上がる。

視線の先を追つて彼らも同じ方向を見る。

そこにいたのは灰色の髪と灰色の瞳の長身の男性。チャコールグレーのスーツをびしっと着こなした一見普通の社会人。けれど私がジラ・コニー学園の生徒であるからして、平社員でないことくらいはわかるだろう。

「お待たせ、クレア。おや……友達かい?」

「パパ。つづん、知らない人」

私は本と鞄を抱えて、パパの元へ歩み寄った。

「アーサー叔父さんが来るんだと思つたのに」

「あこつはまたプリシラと喧嘩してゐよ。困つたもんだ」

「お店で喧嘩してゐるの？ あちやー……店長大丈夫かなあ」

「ちよ……」

無視されたことに腹が立つたのか、私のいなくなつたベンチから男は腰を浮かせるが。

パパがちらり、と視線を送る。その瞳が瞬時にでも、赤く、血のよう赤く瞬いていたのを私は見逃さない。

男達はといえば、まさしく悪魔でも見たかのように硬直して、見る見る青ざめて、動くこともできないようだつた。

そんな彼らを残して、私たちは歩いていく。

「ねえパパ？ いつたいどんなことになつてゐるの？」

「それは田境屋<sup>たけいや</sup>に着くまでのお楽しみだよ」

「こじわる。……め、いいけどさ」

私はパパの横顔を見上げた。パパはどこか楽しげで、元気かうれしそうで、どこか悲しそうだつた。

だから私は毎年言つのだ。

「パパ」

「なんだいクレア？」

「私、パパの娘で良かつたよ」

私はクレアフェルゼ・ルーグ。  
今日でめでたく16歳。  
これは私の日常の中でも、きっと一番いい日になる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3382e/>

---

クレア

2010年12月31日15時38分発行